

接続表現を用いた 語義曖昧性解消に関する研究

和田 継嗣

本研究はブログや会話文などに見られるように省略が多い文における動詞の語義曖昧性解消のために、接続表現が有効であるかを調査した。語義曖昧性解消に関する研究のうち、接続表現を用いた研究はまだないが、接続表現のうち副詞節などの従属節は主文の意味に影響を与えるため、語義曖昧性解消に有効な場合があると考えたためである。

提案手法の概要を説明する。まず、対象とする動詞(多義語)を含む用例文を収集し、その用例文中の動詞の語義と動詞に係る接続表現を抽出する。そして接続表現ごとに動詞別に特定の語義と共起しやすさを計算する。

また、接続表現が動詞の特定の語義と係りやすいのか、それとも語義をある程度同じ意味でクラスタリングした動作概念別に係りやすさが異なるのかも確認するため、接続表現ごとに特定の動作概念との共起のしやすさも計算した。

提案手法を実験した結果、接続表現の一部は動詞の語義曖昧性解消に有効であるということが明らかになった。例えば、「目的」を表す接続表現は、係り先の動詞が高い確率で「自分の意思で行う動作を示す語義」であることや、「条件」を表す接続表現は「自分の意思ではない動作を示す語義」や「ある現象が起こることを示す語義」と係りやすいということが確認された。また、動詞によって語義曖昧性解消に有効な接続表現が異なることが判明した。これは、接続表現はある特徴を持つ語義に係りやすいが、動詞によってそれに該当する語義の数が異なるためである。

これらのことから、接続表現では動詞中のある特定の語義を選択することは難しいが、語義の候補を複数に絞り込むのに役立つと考えられる。よって、接続表現は語義曖昧性解消にある程度は有効であるということが確認できた。

また、接続表現が語義と動作概念のどちらを特定するのに有効かは、対象の動詞によって異なった。今回調査した結果では、動詞の語義がある程度明確にクラスタリングできる場合のみ、語義よりも動作概念の方が接続表現による特定がしやすくなった。

以上をまとめると、本研究では接続表現には語義曖昧性解消に有効なものとはそうでないものが有ること、また接続表現が有効かどうかはその動詞が持つ語義によって異なるということが明らかになった。

(指導教員 関洋平)